

「ホームレス」って、どんな人たち？ 貧困を生む社会を変えるために

今から20年ほど前の冬、横浜市の公園などで「ホームレス」と呼ばれる野宿生活者が襲われ、2名が死亡、13名が重傷を負うという事件が続いた。

まもなく逮捕されたのは、市内の中学生を含む少年10数人だった。このとき逮捕された少年たちの口から出てきたのは、こんな言葉だ。

「横浜の地下街が汚いのは浮浪者がいるせいだ。俺たちは町の美化運動に協力してやったんだ。」

「乞食なんて生きてたって汚いだけ」

(「浮浪者」「乞食」の表現は供述調書のまま引用)

その後も、こうした野宿生活者への襲撃は後を絶たない。藤沢や茅ヶ崎でも、海岸近くの公園で少年たちが野宿生活者を襲う事件が起きている。

だが、こうした襲撃事件を起こした少年たち自身も周囲から疎外されたり、複雑な事情を抱えていたケースも少なくない。「被害者が加害者になる」「弱者が、さらに弱者を迫害する」構図がそこにもある。

だが、野宿生活者に対する偏見は大人の中にもあるのではないだろうか。僕たち大人も、「ホームレス」と呼ばれる野宿生活者の本当の姿をどこまで理解しているのだろうか。少年たちの偏見は、そんな大人たちの偏見が投影されたものではないのだろうか。

「ホームレス」とは、どんな人たちなのか

以前「ホームレス」が話題になったとき、僕の知人は顔をしかめながら吐き捨てるように言った。

「仕事なんて探せばいくらでもあるだろう。あいつらは怠けているんだ！」

だが、そうだろうか。

横浜に寿町という「寄せ場」がある。日雇い労働者の青空労働市場と簡易宿泊所が集まる町だ。

僕は20代の頃、あるきっかけでこの寿町に何度か足を運ぶことになった。

寿町の“おじさん”たちは主に建設現場などで働く。うまく仕事にありつければ、日銭が入る。食事の時にはささやかに安酒も飲み、「ドヤ」と呼ばれる簡易宿泊所に泊まることもできる。

だが、仕事にありつけず所持金が底をつけば、つぎの仕事をもたらるまでは路上で寝泊まりするしかない。

建設現場での仕事はきつい。高齢になり、健康を害したりすると、ますます仕事は遠のく。けっして「怠けている」のではない。

20年前、横浜で少年たちに襲撃されたのも、こうして路上生活を余儀なくされていた人たちだった。

当時、マスコミはこの事件を「浮浪者殺人事件」と報じた。マスコミも、そのような認識だったのだ。

寿の人たちや支援者の抗議に、次第に「浮浪者」という表現は使われなくなった。今は「ホームレス」という言葉が法律の上でも使われる。だが、その認識はあの頃とどれほど変わったのだろうか。

「ネットカフェ難民」の登場

新しい野宿生活者が生まれるようになったのは新自由主義政策によって格差が拡大し、リーマンショック後に「派遣切り」などが横行し始めた頃からだ。

倒産や解雇で路上生活に至る人たちが増えた。

「ネットカフェ難民」という言葉が生まれ、「若者ホームレス」もめずらしくなくなった。

そんな状態に陥るのは、どんな人たちなのだろう。

2010年にNPOのビッグイシュー基金が「若者ホームレス白書」という調査報告をまとめた。これを読んで、僕は言葉に詰まった。

50人に聞き取りをした結果、「養護施設」の出身者が6人もいたのだ。親戚に育てられたり、ひとり親家庭で育った者をあわせると、版数に及ぶ。

誤解のないように言っておきたいが、生育歴を問題にしているのではない。社会的な「孤立」のことを言っているのだ。

僕は、かつて中学校の教員だった。そのときに担任した生徒のSも、親の虐待を逃れて養護施設から通ってくる生徒だった。

中学を卒業したSは寮のある工場に就職した。だが、その工場が倒産する。Sはたちまち路頭に迷った。

もし失業して貯金が底をついても、僕たちなら親や

実家に頼ることができる。でも養護施設は、学校を卒業した者の面倒をいつまでもみることはできない。失業しても、Sには支えてくれる「実家」はないのだ。

アパートを借りようにも、Sには「保証人」もいなかった。Sの場合、学年の教師たちが奔走したからどうにかなったが、今にして思えばSだって「ホームレス」と紙一重のところにいるのだ。

寿町で出会った人たちの中にも、多くは語らないが何らかの事情で家族と離別した人が少なくなかった。

「ホームレスの12%が養護施設出身」という数字が、Sの姿と重なる。貧困や失業という現実は、こうした社会的に孤立した人たちをより過酷に襲うのだ。

それでも、「ホームレスは自己責任」なのだろうか。

「ホームレス」だって働いている

「ホームレスは怖い」と思う人もいるだろう。

でも、野宿生活者の支援活動をしている知人は言う。

「野宿生活者からすれば、一般の人たちの方が怖いだ。罵声を浴びせられたり暴力を受けることもある。野宿生活者は気の小さい人が多い。強気な者なら、野宿生活になどならない」

そう言われて思い当たる。Sや、寿の「おじさん」たちもそうだった。

「ホームレスは怠け者」だろうか。

彼らだって働かなければ生きていけないわけがない。アルミ缶や段ボールの回収などが、彼らの仕事だ。

これはけっして楽ではない。しかも一日の収入はせいぜい数百円。これでは家賃は払えない。住所が定まっていなければ、生活保護も受けられない。

「仕事なんていくらでもある」という。だが「住所不定」「連絡先電話なし」の者を雇ってくれる会社など、ない。

風呂に入れず、衣服の洗濯もできないこともある。でも、それをいちばん気にしているのは彼ら自身だ。

2008年の調査では、野宿生活者の6割以上がうつなどの精神疾患を抱えていたという。多くの人が不安を抱えて生きているのだ。



▲「カマヤんの野塾」より

いま、藤沢で

藤沢では長年、カトリック教会の方たちが中心となって野宿者支援の巡回活動が続けられてきた。こうした人々の地道な活動を忘れるわけにはいかない。

だが、その一方でこんな現実もある。

藤沢駅北口の地下道の壁際にあるときからコンクリートの円柱が設置された。目的は明らかだ。地下道に寝泊まりする野宿生活者を排除するためだ。



では、地下道にいた人たちはどこに行ったのだろうか。「排除しただけ」でその後の生活や就労支援がなければ、何の解決にもならない。

一昨年、前市長の「地域経営戦略100人委員会」が課題のひとつに「ホームレス問題」をとりあげた。

だが、それは労働や福祉の課題としてではない。分類は「環境問題」だったのだ。

これでは、野宿者襲撃を「町の美化運動」と呼んだ少年たちと何も変わらないではないか。

もちろん、一方で市の生活福祉課の野宿者への対応は、一定評価されていることは述べておきたい。

だが残念ながら、湘南海岸での野宿者襲撃は、まだ藤沢市全体の教訓とはなっていないとしか思えない。

2002年、ようやく国会で「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」が成立した。

この法律は第一条で、こう定義した。

この法律は、自立の意思がありながらホームレスになることを余儀なくされた者が多数存在し、健康で文化的な生活を送ることができない

つまり、ホームレスは「自己責任」の問題ではなく、労働・福祉政策、社会的セーフティネットの欠落の問題だと明確にしたのだ。

ようやく路上からでも生活保護の申請が認められるようになり、就労支援も進んだ。

全国で約2万5千人いた野宿生活者は、法の施行後の2010年には約1万1千人へと大きく減った。

これは、成果だろう。だが、問題はまだけっして解決してはいない。

いまや、この国では勤労者の3人に1人が不安定な非正規雇用だ。雇用情勢が悪化すれば、ふたたび路上に追い出されかねない「予備軍」も少なくないのだ。

「ホームレス」問題は「排除」では解決しない。

偏見の除去と、野宿生活者を生み出す失業や貧困問題の解決こそ、その本質なのだ。